KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

テニスの起源と得点の表示法について：起源からのテニスの普及と発展を考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2020-09-16 キーワード (Ja): テニスの起源（tennis origin）, 得点の表示法, ジュ・ドゥ・ポーム, ローンテニス キーワード (En): 作成者: 相良, 博昭 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00007945

関西外国語大学 研究論集 第112号（2020年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.112（September 2020）

テニスの起源と得点の表示法について

── 起源からのテニスの普及と発展を考える ──

相　良　博　昭

要　旨

テニスは、プロスポーツやオリンピックのような競技スポーツだけでなく、生涯スポーツとしても日本のみならず世界的に見ても多くの人々に認知され、また受け入れられている。しかし、様々なスポーツを行う上で、各種目の起源や語源、歴史的背景などを認知しているプレイヤーは数少ないと考える。本稿では、テニスにおける起源・語源について、諸説ある内容を明らかにしたいと考えた。テニスにおける得点表示法についても、他の種目と比べて異なる部分が多くみられることも同様に明らかにした。テニスの起源を明らかにすることで、近代テニスにおける普及と発展を考えていきたいと考えた。

テニスの起源については、ボールを打つ・投げる・ラケットやネットといった用具を使用する、コートサイズや形などどの部分に焦点を当てるかにより、解釈に違いが見られたことなどが明らかとなった。

キーワード：テニスの起源（tennis origin）、得点の表示法、ジュ・ドゥ・ポーム、ローンテニス

１．はじめに

テニスは、現在、アマチュアの競技スポーツや日本一や世界一を目指すチャンピオンシップスポーツとしてだけでなく、生涯スポーツとしても多くの人々から認知され、受け入れられている。しかし、テニスの語源や起源、現在のルール、レギュレーション（コートの大きさやネットの高さなどに関する規則）の変遷について知識として有している選手は、非常に少ない。本章では、諸説あるテニスの語源や起源を明確にすることで、テニスがどのように普及・発展してきたかを明らかにしたい。また、テニスにおける得点表示方法に関する疑問についても、整理しておきたい。

テニス（Tennis）の語源については、諸説が唱えられているが、ギリシャの Phennis、ラテン語の Teniludium、ドイツ語の Tanz などが挙げられる。また、古代エジプト時代にナイル川のデルタ地帯にあったとされるチニス（Tinnis）、またはタミス（Tamis）と呼ばれる町において、後にテニスボールの中の詰めものとして用いられた布を生産していたことから、ボールゲーム

として発展したという説も存在する。次に、英語で play を意味するフランス語 Tenez も、有力な説とされている。直訳すると「受け取る」という意味を有している。フランス語の Tenez 説は、フランス人がテニスにおいてサーブを行う際に日本語で言う「受け取れ！」「行くぞ！」という掛け声をかけてからゲームを始める習慣があり、これを見たイギリス人がテニスと聞き間違え、叫ぶようになったというものである。イギリスの詩人ガウアー（Gower: 1330?-1408）は、当時フランスで作られた手の平でボールを打ち合うジュ・ド・ポームやイギリスのファイブズ（後のリアルテニス・ローンテニスなど）というボールゲームを、Tenetz と紹介している。

テニスの語源は、明確にされていないが、テニスの原型とされているフランスのジュ・ド・ポーム（Jeu de paume）[1] とイギリスにおいて現在のテニスの基礎を築いたとされるイギリスのローンテニス（Lawn tennis：芝生で行うテニス）に見られるように、両国の相乗効果により発生したものとするのが最も有力である。

2．テニスの起源と近代テニスの誕生

2.1 テニスの起源

次に、テニスの起源について考える。複数のプレイヤーでボールを打ち合うという行為は、紀元前の壁画において同じような様子が描かれている。これはテニスだけではなく、ボールを利用した多くのスポーツのルーツと考えられる。テニスの起源として最も多くの文献で述べられているものとして、11世紀ごろのフランスの修道院が発祥とされるジュ・ドゥ・ポームがある。若い修道士達が手の平でボールを打ち合いゲームとして楽しんだという。ポームとは、フランス語で手の平を意味する。その後、15世紀に入って手の保護のために手袋（グローブ）をしてポームを始め、16世紀にはラケットやネットを使ってジュ・ドゥ・ポームを楽しむ文献が多く見られるようになった。この頃のジュ・ドゥ・ポームには、主に貴族や有産階級が室内コートを利用して行うクルト・ポーム（court paume：短いポーム）と、一般市民が広い公園や野原を利用して行うロング・ポーム（longue paume：長いポーム）とがあった。16世紀に入ると手袋だけではなく、ラケットや棒でポームが行われるようになった。テニスだけでなく野球やサッカー、ラグビーなど、多くのボールゲームのスポーツは、11世紀頃の中世のフランスやイギリスなど、ヨーロッパが起源とされており、スポーツの用具や規則などの改良が行われ、ゲーム（遊び）として日常生活に浸透していったと考えられる。フランスで盛んに行われていたジュ・ドゥ・ポームがいつイギリスに伝わったかは明らかにされていないが、イギリスではリアルテニスとかローンテニスと呼ばれるようになり、ヨーロッパを中心に近年においても盛んに行われているクリケットとともに、多くのクラブが作られ、様々なルールやレギュレーションの下で広く行われてきた。17世紀には、シェークスピアのハムレット戯曲の中でテニス

やテニスボールという言葉を用いられている。

テニスの起源をどことするかは、起源の視点をどこと定めるかによって大いに異なる。しかし、現代のテニスに見られるラケットやネットのような用具や用品が改良され、ヨーロッパを中心とした各地で多く設立されたクラブによって、様々なルールやレギュレーションが作られたことは、ジュ・ドゥ・ポームの繁栄が基盤となっていることは明らかだと考える。

2.2 近代テニスの誕生と普及

一般的に、ジュ・ドゥ・ポームがラケットやネットを利用してボールを打ち合う現在のテニスの原型とする説が有力視されている。19世紀に入ると、ジュ・ドゥ・ポームはフランス国内だけでなく、国際大会が開かれるようになった。イギリスにおいては当初リアルテニスと呼ばれ、各コートやクラブにおいてローカルルール（開催地や大会ごとで適用する特別なルール）が作られ実施されていたことで、大会ごとにルールの確認が行われ、議論され続けた。共通ルールの構築は、各クラブ間の思惑も絡んで確立に至らなかった。時には別の競技（ゲーム）とする見方もあった。各クラブにおいて共通ルールの議論がされ始めた頃、1873年イギリスのウオルター・クロプトン・ウイングフィールド少佐（Walter Clopton Wingfield）[2] は、ルールやコートの広さ、用具などを示したギリシャ語で「スファイリアリステク」（またはスフェリスティキ）[3]、英語でローンテニス（lawn tennis）という本を出版しその後特許を申請した。ウイングフィールドの考案したコートは、現代のコートと違い、コート中央部が砂時計のようにくびれている型をしていた。これより、それまで多くのルールが存在したリアルテニスも、同型のコートが、多く存在していたのではないかと考えられる。ウイングフィールドは特許によりコートやルールにおいて厳格化を図ったため、オールイングランドローンテニスアンドクロッケークラブ（The All England Lawn Tennis and Croquet Club）は、1877年ローンテニスの競技用ルールの策定をマリンボーン・クリケットクラブにおけるテニス選手であったジュリアン・マーシャル（Julian Marshall）、ヒスコート（C.G.Heathcote）、らに依頼し、統一ルールを作成した。1882年当時クラブの活動は、ローンテニスに限定されており、クリケット（Croquet）の名称が外されていた時期もあったが、これまでの伝統を重んじ現在においても同名称が使われている。統一ルールにおいて第１回ウインブルドン大会（後の全英オープン）が行われた（cf. 岸野雄三〔編〕1998:837）。第１回大会は、サイズが若干異なるが、現代のコートとほぼ同型であり、同年マーシャルはテニス年代記を出版した。大会の成功とともに、これ以降、ローンテニスにおける統一ルールへの動きが加速度的に増したことにより、多大な功績を残したと言える。

3．テニスの得点の表示法

3.1「15」ずつ増えるテニスの得点表示法

テニス競技が、他のスポーツ種目と大きく異なる点は、15ずつ増える得点表示法にあると言える。他のスポーツ種目では、基本的には１点ずつ増加する。１点以外の種目としては、バスケットボールでは、通常２点あるいは３点（スリーポイントシュート）、ラグビーにおいては、トライで５点、ゴールキックが２点、あるいは３点、アメリカンフットボールではタッチダウンで６点などがある。テニスの15点は、他の種目にも見られないほど多くの点数が一度に入れられ、テニスプレイヤーなら誰しも、一度は疑問に思うことである。

現在のテニスの得点の数え方は、０－15－30－40の４ポイントで、これは世界共通である。19世紀当初におけるローンテニスの得点の数え方は、15－30－45－60の４ポイントで１ゲームが終了であった。ローンテニスにおける得点には、現在の０（ラブ）という概念はなく、「60」という得点が存在したことは、現在のテニスと相違する点である。また1555年、世界で最初にテニスの本を書いたとされる神学者のアントニオ・スカイノ（Antonio Scaino）は本の中でゲームは15，30と、１ポイントに15ずつ上がると示している。すなわち、それ以前より現在の得点表示法が利用されていたことになる。

得点表示法の諸説については、主に次の２つが最も有力とされている。一つめは、得点板として、時計の文字盤をそのまま使用していたという説である。時計の長針と短針を利用し、60分を４等分し、15分を１クオーターとして針が１週、すなわち４ポイント取れば１ゲームが終了するという説である。時計の文字盤説は、実際に使用していたという文献もあり、信憑性が高い。

もう一つは、修道院の日常生活の時間割（スケジュール）から来ているという説である。テニスの原型は、フランスの修道院で考案されたジュ・ド・ポームであり、修道院の一日の生活時間（朝のお祈り、食事、掃除、読書など）の区切りのほとんどがクオーター（15分）を基本に割り振られていた。

その他にも、占星学説や貨幣単位説など、諸説見られるが、フランスの修道院で考案されたジュ・ド・ポームを発端としていること、多くの説において時計の文字盤を利用していたとする文献が多いことから、時計の文字盤から来たとする説が最も有力であることは、明らかである。

3.2「０」をラブとする語源

テニスにおいて試合が開始される０－０の状態から、審判は「ラブオール」と叫び、試合が開始される。ゲーム中のポイントコールは、15－０（フィフティーンラブ）、30－０（サー

ティーラブ）とコールする。また、1ゲームごと終了した時点での各セットのカウントのコールについても、1－0（ワンラブあるいはワンツーラブ）、2－0（ツーラブあるいはツーツーラブ）と0をラブと呼ぶ。また、テニスの試合において相手が一方的に強く、1ポイントも取ることができない、あるいは1ポイントも与えなかったゲームをラブゲームと呼ぶ。ラブゲームの英語の綴りも love Game とされている。他のスポーツにおいて「0」をゼロ以外に呼ぶ種目は見られないと考えられる。「0」をゼロではなく、ラブと呼ぶことについても、ラブとは愛という意味ではないのかと、得点表示法と同様に、皆が疑問に感じていることである。

これについても多くの諸説が述べられており、整理してみる。

最も有力な説とは、0が卵の形に似ており、フランス語で卵はルフ（L'oeuf）と発音する。これをイギリス人が英語のラブと聞き間違え、習慣化したという説である（cf. 福田雅之助　1973:27-28）。第2は、イギリスでテニスとともに古くから行われてきたクリケットにおいて、打者が1点も獲得できずアウトになった時に、アヒルの卵（duck's egg）と呼んでいたという説である。第3に、現在は死語となっているが、元々ラブ（love）には、nothing あるいは zero という意味が存在し、何も持っていない人は可哀想、可哀想な人は愛を持って見守ろうという考えから来たとする説である。第4に、古代ローマ人の饗宴の最初にゲストに対して当時より貴重で栄養のある食べ物として卵を差し出す習慣があったことから、最初から卵を連想させたという説である。

「0」の語源としては、第3の love 説以外は、卵が関係していることから、卵が有力な説であり、諸説同士を相補する関係と見ることができる。

3.3 省略されたフォーティーファイブ

現在では0－15－30の後、3ポイント目を40（フォーティー）と示し､45（フォーティーファイブ）とは呼ばない。これは、単に省略された結果とする説が定説となっている。過去の文献を見ても、1ポイントは15ずつ増え、3ポイント目を45と示しているものや40と示しているもの、両方が見られる。時計の文字盤を得点表として利用した場合と、45対45とするとデュース（Deuce）の表示がし難いため、40対40（フォーティーオール）に戻して、次のポイントを取得したプレイヤーに対して10ポイントをプラスし、50としてアドバンテージ（advatage）とし、同じプレイヤーが次のポイントを取って1ゲーム終了としたという説がある。両説も、45を省略したという点は同様であることから45の5を省略したとする説が最も有力な説と考えられる。

4．近代テニスの発展と女性のスポーツ参加

ウインブルドン大会（全英オープン）の成功以降、1881年全米オープン、1891年全仏オープン、1905年全豪オープンが開催され、また1925年には全仏オープンが他の多くの国のプレイヤーの参加を認めたことなどから、4大大会[4]の基礎が確立され、全世界へ爆発的な広がりが見られることとなった。4大大会を同じ年内に制覇することを、年間グランドスラムと言う。4大大会のうち全英オープンはローンコートあるいはグラスコート（天然芝）、全仏オープンはアンツーカーコート（赤土）、全米・全豪オープンはハードコート（コート表面が固い）と、全く異なるコートで試合を行う。コートが異なることで、ボールのバウンドの仕方やボールのスピード、コートの滑りやすさ、ボールのはね方の違いによるイレギュラーなど様々な違いが生じることで、試合の展開や試合の運び方など、大きく変化しなければならない。また天候や温度・湿度の変化なども、コートにより大きく影響を受ける。

また今日の発展には、女性のスポーツ参加も大きな要因と言える。1884年の第8回ウインブルドン大会において女子シングルスが開催された。それまでも女性におけるスポーツは、貴族や有産階級の社交の機会としてすでに行われてきたが、他のスポーツに先駆けて競技スポーツとして確立し、また1900年のオリンピック（パリ大会）において、ゴルフとともに女子の参加が認められた。当時、他の多くの種目については、女性のスポーツ参加について否定的な意見が多く存在したのは事実である。また、男女混合で行うミックスダブルスは、1892年に全米オープンで初めて開催された[5]。競技スポーツにおいて男女混合で行うスポーツは、現代においてもバドミントンや卓球などのみで非常に少ない。オリンピックにおける女性のスポーツ参加を見ても、多くの種目が1920年代以降である。現在においては、プロスポーツの多くの種目において女性参加の競技が多く行われているが、年間獲得賞金や生涯獲得賞金のランキングの上位は、テニスが占めていることからも、テニスが先導的役割を果たし、女性のスポーツ参加全般において大きな影響を及ぼしたと言える。

5．おわりに

本研究においては、テニスの起源・語源や得点の表示法を整理し、テニスの近代化から見た普及と発展について検討を行った。

テニスの語源や起源については、どの点に焦点を当てるか、つまりボールを打つか投げるか、蹴るか、ラケットやネットといった用具の使用・不使用、コートのサイズや形など、どの部分に焦点を当てるかにより、解釈に大きな違いが見られることが推察された。近代テニスの誕生と普及においては、11世紀に入って主にフランスにおいて行われたジュ・ドゥ・ポームが

起源と考えられ、後にイギリスにおいてウオルター・クロプトン・ウイングフィールド少佐のローンテニスが普及において大きな影響を及ぼしたことが分かった。また現代のルールやレギュレーション・得点の表示方法との相違点などで違うことが明らかとなった。

近代テニスにおいての普及や発展については、ウインブルドン大会の成功以降、ローンテニスは、統一ルールの制定により現代のテニスの基礎を築き、競技スポーツとしてオリンピックなどの国際化を図り、さらに女性のスポーツ参加においても、他の競技と比較して先行する形で大きく貢献している現状が明らかとなったと言える。

註

1）手の平で打ち合うジュ・ドゥ・ポームが、ラケットを使用するのに約500年、費やした。

2）1400年代よりウイングフィールド城の城主の家系出身で、王室のボディガードを務めた。1997年国際テニス殿堂入りした。

3）ギリシャ語の「スファイアリステク」（スフェリスティキ）という言葉は、イギリス人に大変覚えにくい言葉だったため、芝の上で行うテニスということから、「ローンテニス」と呼ばれるようになった。

4）全英、全米、全仏、全豪オープンを４大大会とする。４大会をすべて制することをグランドスラムまたは、年間グランドスラムという。現在においては、選手期間を通して４大会制覇したことも同様に、グランドスラムと称している。

5）全英オープンにおいてミックスダブルスが開催されたのは、1900年、公式競技として採用されたのは、1913年。

参考文献

１．書籍関係

福田雅之助・井上昶ほか（1973）『図説テニス事典』東京：講談社。

Gillmeister, Heiner（1993）*Tennis: A Cultural History*、Trade paperback, New York University Press, 1998［稲垣正浩・奈良重春・船井広則（共訳）（1993）『テニスの文化史』東京：大修館書店。］

稲垣正浩（2002）『テニスとドレス』東京：叢文社。

岸野雄三（編）、日本体育協会（監修）（1998）『最新スポーツ大事典』東京：大修館書店。

日本テニス協会（編）（2005）『テニス指導教本』東京：大修館書店。

Lance Tingay（1977）：100 Years of Wimbledon.London Guinness Superlatives Ltd.

２．ウェブサイト（インターネット）

http://www.wimbledon.org/en_GB/index.html （全英オープンテニスオフィシャルサイト）、アクセス日

2020年３月30日
www.usopen.org/　（全米オープンテニスオフィシャルサイト）、アクセス日2020年３月30日
news.ternnis 365.net.wimbledom/history/history.html. アクセス日2020年３月30日

（さがら・ひろあき　短期大学部准教授）